

〈論 文〉

安部公房と満洲亡命文学

——『けものたちは故郷をめざす』における「逃走」と「他者」——

解 放[†] (東京外国語大学大学院・総合国際研究科・博士後期課程)

Abe Kōbō and Manchuria Expatriate Literature:
"Escape" and "the Other" in *Beasts Head for Home*

Xie, Fang

(Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies, Doctoral Program)

キーワード：安部公房、『けものたちは故郷をめざす』、引揚げ文学、満洲亡命文学、抑圧

Keywords: Abe Kōbō, *Beasts Head for Home*, Repatriate Literature, Manchuria Expatriate Literature, Repression

要旨：本稿では、安部公房の『けものたちは故郷をめざす』を研究対象に、引揚げ者が同時に植民者でもあって、他者を抑圧する側面を持っていたことを実証し、引揚げ作家としての安部公房が持つ抑圧者としての側面について論じた。更に、安部の作品と満洲亡命作家の諸作品との関連性を検討することにより、引揚げ文学には引揚げ作家自身の実体験のみではなく、満洲亡命作家などの多層的な実体験も投影されていることを明らかにした。

Abstract: Abe Kōbō is one of the representative writers of Japan. Abe spent his adolescence in Manchukuo and returned back to Japan in October 1946. Abe published the novel *Beasts Head for Home* in 1957, which centered on his experience in colonized Manchukuo. This study focuses on the representation of repressive features of repatriates in *Beasts Head for Home* and discussed the characteristics of Abe as the oppressor. The study aims to clarify the similarity between Abe's works and Manchuria Expatriate Writers' works. Repatriate Literature does not reflect only its writer's experience; it also has influence from Manchuria Expatriate Writers' experiences.

原稿受理日 (2018-10-01)

査読後掲載決定日 (2019-01-15)

日本研究教育年報. 2019, Vol. 23, pp. 55-73. ISSN 2433-8923



[†] 本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC BY) 下に提供します。 <https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

はじめに

安部公房は、1924年に東京で生まれ、誕生後間もなく満洲に渡った。満洲の都市・奉天で青少年期を過ごした後、進学のため日本に戻るが、終戦間際に再び満洲に渡り、そのまま満洲で終戦を迎えた。安部が引揚げ者として日本に戻ってきたのは1946年10月である。10年後の1957年1月、安部は自らの引揚げ体験を素材にした『けものたちは故郷をめざす』を刊行した。一般的に引揚げ体験を描く作品は引揚げ文学と呼ばれ、その特徴の一つが、登場人物の「移動」が作者の引揚げとほぼ重なり合うことである。しかし、本作で展開されている登場人物の「移動」は、徐々に目指す目的地を失うという特殊な「移動」であることは看過できない。例えば、主人公・久木久三は、最初は日本を目的地として計画通りに旅しているが、徐々に日本へ向かうことよりも満洲から逃亡するということに夢中になってしまう。つまり、本作における登場人物の「移動」は、作者・安部公房自身の引揚げ体験とは意味合いが異なるのである。

更に、久三の特殊な「移動」が、満洲亡命文学に見られる登場人物の「移動」と共通するものがある点は注目に値する。とりわけ、魯迅の推薦で1930年代に日本に紹介された満洲亡命作家の代表者・蕭軍の短編小説『同行者』に描かれている「移動」は、『けものたちは故郷をめざす』と共通している箇所が多い。本稿では、安部が蕭軍の作品に触発されて『けものたちは故郷をめざす』を創作したことについて考察し、久三の「移動」が、安部の引揚げ体験のみを素材にしているのではなく、満洲亡命作家・蕭軍の亡命経歴を含む多層的な実体験をモデルにしている可能性について分析する。最後に、安部の『けものたちは故郷をめざす』と蕭軍の諸作品との関連性を検討し、引揚げ者である安部公房における抑圧者としての側面と、亡命者である蕭軍の被抑圧者の側面との比較を通して、日本近代文学における引揚げ文学と、満洲亡命文学との接点を探ってみたい。

一、引揚げ文学と安部公房

敗戦後の日本には、それまでの植民地と占領地から、兵士と民間人を合わせて六百万人以上の人々が引揚げてきた。六百万を超える引揚げ者のうち、民間人はおよそ三百万人、満洲からの引揚げ者はおよそ百万で、朝鮮半島からは概ね七十万人の引揚げ者がいた¹。こうした膨大な引揚げ者のうち、作家の道を選び、自らの引揚げ体験を物語化する者も少なくなかった。引揚げ文学とは、こうした引揚げ作家が自らの引揚げ体験を描いた文学作品のことである²。ここで、留意しなくてはならないのは、引揚げ体験を描く作家すべてが「引揚げ作家」ではないということである。朴裕河は、引揚げ体験を描く作家の中で、青少年期を植民地で過ごし、植民地や占領地のみを「故郷」と認識する作家を「引揚げ作家」と定義付けている。

¹ 若槻泰雄『戦後引揚げの記録』時事通信社、1995年10月、p.369

² 「引揚げ文学」は様々な名称を持つ。尾崎秀樹は「外地引揚げ派の文学」と呼び、西成彦は「引揚げ者の文学」を使っている。本稿では、朴裕河の言葉「引揚げ文学」を使う。

彼らが植民地で生まれ育った少年や少女であったこと、つまり自らの意志とは関係なく、占領地・植民地に身を置かれ、かかわってしまったという、その微妙な「位置」にある。[...] つまり、彼らにとっては良くも悪くも占領地や植民地が「故郷」だったのであり、彼らの感受性は、程度は異なっているけれども植民地の風景や人びとによって培われたものでもあった。³（下線筆者、以下同じ）

引用部に示される通り、少年期を植民地で過ごし、終戦前まで植民地に滞在した引揚げ作家は、内地の日本を故郷だと認識しておらず、外地の植民地こそが故郷であると考えている。引揚げを経て、現実の戦後日本を目の当りにした引揚げ作家は、その荒廃した風景と美化された風景との落差に驚いたはずである。こうした引揚げ作家が、植民地・占領地からの帰還といった集合的体験をもとに描いた文学作品こそが引揚げ文学であり、この引揚げ文学は、戦後の日本文学における重要な研究対象と言えるだろう。引揚げ文学を系統的に論じた朴裕河の『引揚げ文学論序説』について、筆者は三つの問題点を指摘したい。

まず、朴は著作の中で引揚げ作家を「精神的ディアスポラ」という帝国の棄民と称し、引揚げ文学を被抑圧者の文学としてひとくくりに論じることが多いという点である⁴。次に、数多くの引揚げ作家の中で、朴が研究対象として論じたのは朝鮮からの引揚げ作家であり、満洲からの引揚げ作家を見過ごしているという点である⁵。最後に、朴は、引揚げ作家は自らの引揚げ体験をもとに作品を創作していると述べているが、引揚げ文学は、必ずしも作者自身の引揚げ体験のみで構成されている訳ではないという点である。本稿では、安部公房の作品を通して上記の問題点を明らかにして、引揚げ文学の異なる一面を提示したい。

安部は青少年期を植民地で過ごし、植民地に対して親近感を持ち、引揚げ体験を作品に描くことで、引揚げ作家としての要素を全て備えている⁶。ただし、安部は植民地に親近感を抱いているが、満洲を故郷として認識しているとは言えない。実際、彼は植民地を故郷と思うことに対して嫌悪感を覚え、自分を引揚げ者と定義すること自体には否定的である。

³ 朴裕河『引揚げ文学論序説——新たなポストコロニアルへ』人文書院、2016年11月、p.30

⁴ 引揚げ作家における抑圧者の側面を論じる箇所もある。例えば、「彼らが帰国後に最初に感じたのは、それまでの観念的に注入されてきた「祖国」の、想像と期待とは違っていた、失望の混じった驚き、それにとまなう優越感であった。」（前掲書、p.40）に述べられているように、朴は引揚げ作家の暴力性を指摘している。ただし、こうした論述が全篇に占める割合は低い。

⁵ 『引揚げ文学論序説』で主に論じられている引揚げ作家は、湯浅克衛、小林勝、後藤明生であり、いずれも、朝鮮からの引揚げ作家である。

⁶ 安部公房は満洲について、「私はこの敗者の町が好きだった。[...] 私が物心つくまでのぜんぶをすごした愛すべき土地であったのに。」と述べている。（『瀋陽十七年』『安部公房全集 4』新潮社、1997年、p.90）

瀋陽を出身地だと割切ってしまえない理由であるが、簡単に言うと、われわれ日本人はそこで植民地の支配民族として暮らしていたのだということである。私の意識にはそういうものはほとんどなかった。しかし現実と意識とは別である。[...] 植民地を故郷だということは絶対できないことである。⁷

引用部に示されるように、安部は明らかに植民地を故郷とすることには抵抗している。このように、引揚げ作家の中にも、植民地を故郷と見做さない人がいることは看過すべきではない。安部が植民地を故郷と見做さないのは、植民地こそが自分の故郷であるという認識は植民者における加害者意識に繋がってしまうからである。彼が植民地を故郷と思うことに対する抵抗は、自己を加害者＝抑圧者の立場に位置づけることへの拒否を意味していると言えるだろう。しかし、「私の意識にはそういうものはほとんどなかった。しかし現実と意識とは別である。」という安部の言葉に見られるように、引揚げ者とは植民者であり、被植民者にとっては加害者であるため、抑圧者としての側面を持っていることも事実なのである。言い換えれば、安部は意識的に引揚げ者＝植民者というレッテルを拒もうとしているが、現実引揚げ者である以上、その抑圧者というレッテルを剥すことは不可能なのである。このような引揚げ作家の安部公房における植民者＝抑圧者としての側面を考察するに当たって、重要な研究対象となるのが『けものたちは故郷をめざす』である。

二、『けものたちは故郷をめざす』における抑圧者の視線

『けものたちは故郷をめざす』は、安部公房が自身の引揚げ体験をモデルにしていると唯一公言した作品である。本作は1957年1月に『群像』で連載され、同年4月に大日本雄弁会講談社より刊行された長編小説である。本作の梗概を簡単にまとめる。

主人公・久木久三は母と満洲で暮らしている。久三が十六歳の時に日本は戦争に負け、彼が暮らしている植民地都市・巴哈林はソ連軍に支配される。母は敗戦後の動乱の中で亡くなり、孤児となった久三は引揚げることができず、ソ連軍と二年間生活を共にする。久三は二年後に機会を得て巴哈林から逃走し、高石塔という人と同行して南へと向かう。久三は辛うじて瀋陽に着くが、高石塔に所持品をすべて奪われてしまう。行き場を失った久三は、瀋陽で大兼という日本人と出会い、日本に向かう密輸船に乗り込むが、結局、船に閉じ込められたまま、日本へ帰ることなく物語は終わる。

梗概に見られるように、『けものたちは故郷をめざす』は、久木久三という主人公の引揚げの全過程を描くものである。安部は本作について、「やっと引揚げ船に乗り込めた。上陸まぎわに、船中にコレラが発生し、港外に十日近くもとめられ、発狂する者まであらわれた。(この時の異常な体験が、「けものたちは故郷をめざす」の背景になっている。)」⁸と述べている。「コレラ」は、本作に描かれている重要なプロットの一つであり、上陸間際の引

⁷ 前掲書 6、p.87

⁸ 安部公房「年譜」『新鋭文学叢書 2 安部公房集』筑摩書房、1960年12月、pp.278-279

揚げ船で発狂する人間の記述は、小説終盤の描写と重なっている。従って、本作は安部自身の引揚げ体験を基にしていると言えるだろう。安部は自らの経験を作品に織り込む手法に対しては否定的に捉えているが、本作についてのみ、テキストと自身の経験との関係を明確に語っている。この安部の記述があるからこそ、本作に関する先行研究はほぼ全て、本作が安部の引揚げ体験を反映しているという大前提の上で論じられている。鶴田欣也は、「この小説は作者のトラウマ原体験に相当に接近しながら書かれている。」⁹と、作品に通底しているのは安部の「原体験」とであると論じている。『けものたちは故郷をめざす』と安部の実体験との関わりを最も詳しく論じた小林治は、次のように述べている。

『けものたちは故郷をめざす』は、安部公房の数多い作品の中で、実質的に唯一といっていいくらい歴史的に存在した街や土地が作品の舞台となり、かつて呼称されたその具体名も示されている。[...] そして、そのような作品を書いた背景に、安部の満洲体験があることはとりあえず指摘しておかねばならない。¹⁰

小林は、本作を安部公房の実体験を記録した自伝的性質を持つ作品であると認めている。『けものたちは故郷をめざす』において、安部自身の経歴を最も反映しているのは、恐らく、「日本海の夢をみていた。[...] それは彼を置き去りにし、追い出した、巴哈林の町にそっくりだった。巴哈林がそのまま、引越していったようさえあった。」¹¹という終盤の描写である。

下線部に示されるように、久三の内面において、目的地である日本は、今まで暮らしてきた植民地・巴哈林と融合している。日本と満洲との境界線が曖昧になっていることは、安部公房の曖昧な故郷意識を示唆していると思われる。安部は自身の出身地について「私はそのときの気分にかかせ、時には東京と書き、時に瀋陽と書くことにしている。[...] 主な名簿には東京か瀋陽か、どちらかになっていることが多い。比率は五分五分である」¹²と述べている。安部にとっての故郷とは、満洲である同時に日本でもあるという決定不可能なものであるために、彼の故郷意識が曖昧だと言えるだろう。ただし、ここで重要な問題が生じる。安部の実体験をこれほど反映している『けものたちは故郷をめざす』が初めて刊行されたのは1957年1月である。安部は、日本に引揚げた46年10月から既に文学活動を始めたにもかかわらず、なぜ、引揚げから10年以上過ぎた時点で、初めて植民地での実経験を作品に描いたのだろうか。その理由の一つは、安部公房が1950年代初期から社会現実を記録する「ルポルタージュ」に没頭していたことにあると先行研究では指摘されてきた。有村隆広の論考を以下に引用する。

⁹ 鶴田欣也「『けものたちは故郷をめざす』におけるアンビバレンス」『日本近代文学』第20号、1974年5月、p.108

¹⁰ 小林治「安部公房『けものたちは故郷をめざす』について：満洲体験の対象化をめぐる」『駒沢短大文』第25号、1995年3月、p.54

¹¹ 安部公房「けものたちは故郷をめざす」『安部公房全集6』新潮社、1998年1月、pp.420-421

¹² 前掲書6、p.86

1952 年（昭和 27）、この頃より記録文学への志向を強め、島尾敏雄、真鍋呉夫等と、「現在の会」を結成する。この時期から、安部は、その作風に広がりを見せ始めている。つまり、ドキュメンタリズムを応用する小説へと関心を向けている。[...]そして本論で取り上げる『けものたちは故郷をめざす』がそれに相当する。[...]この小説は、一種のドキュメント風の小説、いわば記録文学の性質を有している。¹³

有村は『けものたちは故郷をめざす』を「一種のドキュメント風」の小説と評し、本作を記録文学に分類している。有村の他に、本作と記録文学との関連性に注目したのは呉美姪である。『けものたちは故郷をめざす』に関する氏の論述も注目に値する。

この時期、安部公房のテキストには、ルポルタージュそのものよりは、ルポルタージュ的な文体への変化というべきものが見られる。記録的手法は『壁』前後の観念的で寓意的な文体から〈即物的〉な文体への変化に生かされていたのである。実際の結果として、記録論の間に発表された『けものたちは故郷をめざす』（1957）は、そのような即物的で客観的な文体で書かれた最初の長編といえる。¹⁴

両氏の論考は、安部の文学理念の転換期に本作を位置づけようとしている点で、『けものたちは故郷をめざす』がただ彼の実体験を反映したものだという今までの考察とは異なっている。安部が 50 年代初期に「ルポルタージュ」に関心を持ったのは、ジャーナリズムへの不信、報道への不信といったイデオロギーの対立に由来する¹⁵。しかし、有村と呉の論考に見られるように、50 年代後半では、安部は 50 年代初期における社会現実をそのまま記録する「ルポルタージュ」の創作よりも、「記録文学の性質」や「ルポルタージュ的な文体」を持つ小説、つまり、事実を「ルポルタージュ」の形ではなく、小説の形で記述する創作方法を模索し始めたのである。『けものたちは故郷をめざす』が刊行された直後、安部はエッセイの中で、「記録精神」について次のよう述べている。

リアリズムというのは、要するに、とらえる対象を現実においているということだと思うのだが、[...] この場合、現実はずでに出来上ったものとして、作品以前に認識されてしまっているわけだ。しかし、現実とは作品以前に存在はしえても、認識されているとはかぎらない。[...] 必要なのはまず方法の自覚なのである。そして、方法への関心とは、そのまま作家としての現実への関心であるはずであり、私たち

¹³ 有村隆広「安部公房の小説『けものたちは故郷をめざす』-カフカ文学との対比-」『言語文化論究』第 10 号、1999 年 3 月、p.119

¹⁴ 呉美姪「ルポルタージュからドキュメンタリーへ」『安部公房の〈戦後〉——植民地経験と初期テキストをめぐる』クレイン、2009 年 11 月、p.135

¹⁵ 鳥羽耕史『1950 年代——「記録」の時代』河出書房新社、2010 年 12 月、p.10

はこのもっとも端的な表現を、「記録精神」とよんでいるわけなのである。¹⁶

引用部に書かれているように、『けものたちは故郷をめざす』が書かれた時期の安部は「記録」がリアリズム文学における事実の提示の仕方に新しい可能性をもたらすというところに魅力を覚え、「記録」に必要なのは「方法の自覚」と述べている。この「方法の自覚」とは、前文で論じた、事実を小説の形で記述するという方法論を指し示しているのではないだろうか。更に、この新しい方法論は安部の過去の「記憶」と関係していると思われる。呉美姪は安部が引揚げ体験を 10 年後に描いたことについて、「戦後十年も過ぎて「引揚げ」という題材を改めて小説化したのは、一九五〇年代半ばにおける安部公房が外見的な戦後社会の安定とは裏腹に、そのなかで置き去りにされていく「大衆」の姿に、戦争によって見捨てられていた「日本人」の記憶を重ね合わせたからなのであろう。」¹⁷と述べている。安部が過去の実体験に象徴される「記憶」を通して、戦争中に見捨てられた「棄民」としての日本人の惨状を作品で暴くことによって、戦後日本における被抑圧者の排除という事実を改めて喚起しようとした意図を指摘している。

このことから、50 年代後半の安部公房が模索しようとした方法論とは、小説の形で事実を提示するものであり、この方法論は「記憶」の再構築を基盤とする文学的な記述方法と言えるだろう。つまり、引揚げから 10 年後に植民地体験や引揚げ体験をモデルにした『けものたちは故郷をめざす』が書かれた背後には、こうした体験が象徴する過去の「記憶」を再構築しようとする安部の姿勢が隠されている。ただし、安部の「記憶」の再構築は、引揚げ者＝植民者のアイデンティティを改めて確認させる行為であるため、それが抑圧者の視線を通しての再認識であることを看過してはならない。

本作に関する多くの先行研究は、久三を本土（日本）に捨てられた棄民＝被抑圧者と見なしている。例えば、田中裕之は久三の人物像について、「久三は諦めることを知らず、苛酷な荒野で見せた根源的な生命力と未来を切り開いていく力を、最終場面においても発揮しようとしているように見える。このような人間の力を描くことこそが、安部のこの作品における主眼であっただろう。」¹⁸と述べ、苦しい旅を乗り越える引揚げ者の努力に感服している。上記の論述では、棄民である久三の生命力を称え、日本の植民地政策を批判しながら、戦後日本社会の現状に主眼を置いている。しかし、引揚げ者が棄民であることは否定できないが、同時に植民地の原住民にとっては植民者であることも事実なのである。こうした先行論は、本作が占領側の人間のストーリーを描いていることを見過ごしていて、植民地や占領地側への言及は少ない¹⁹。本作において、久木久三における

¹⁶ 安部公房「記録精神について」『安部公房全集 8』新潮社、1998 年 3 月、pp.322-323

¹⁷ 前掲書 14、p.181

¹⁸ 田中裕之「安部公房『けものたちは故郷をめざす』考」『近代文学試論』第 32 号、1994 年 12 月、p.48

¹⁹ 本作を植民者＝抑圧者の視線による物語と論じた先行論として、呉美姪の考察が挙げられる。呉は、「さらに倒れた高をそのまま見捨てる行為は、高に騙された「被害者」の立場から「加害者」の立場に逆転することを意味しており、自分だけ生き残ることに対する罪悪感が生じる要因にもなっている。」（前掲書 14、p.169）と述べ、久三の「加害者」の側面を論じている。

植民者＝抑圧者の視線は次の引用箇所から察することができる。

ふとまえに、男がいた。男は沢山いたが、ほかのとはちがう、特別な男だった。目立たない服装だったが、その直線にちかい肩の線、関節に力のはいった手のふりかた、とくに膝をまげた歩きかたと、横幅のある首のつけ根……日本人だ！朝鮮人ではない、たしかに日本人だ。[...] 久三も負けてはいなかった。ぴったりと横に並んで、とびはねながら、のぞきこむようにして、言い続けた。²⁰

引用部に示される通り、久三は外観のみで「男」を日本人だと即座に識別している。後ほどわかるが、この「男」は大兼という日本人で、久三の憶測が正しかったことになる。久三が言葉などではなく、外見で「男」を日本人と識別ができたのは、恐らく、彼に内在する同じ日本人としてのアイデンティティによるのであろう。注目すべきなのは、久三が「日本人だ！朝鮮人ではない、たしかに日本人だ。」と叫んでいる点である。つまり、ここで前景化されているのは、「朝鮮人」という被植民者に対する植民者「日本人」の優位性であり、「日本人」という共同体に入り込もうとしている久三は、自己の「日本人」としての優位性を強調しようとしている。久三の日本人としてのアイデンティティを顕著に表しているのは次の引用である。

しかし久三ははじめどうしてもその男に気を許せないものを感じて厭だった。[...] 男は席をととのえるとすぐに眼鏡をかけて本を読みはじめた。それをみると久三は、こんどは急にまた安心してしまった。ありふれた黒枠の眼鏡をかけると、男の顔はまるで学校の先生のようにみえるのだ。それに中国人でこんなときにも本を読めるという人は、よほど偉い人にちがいあるまい。[...] あらためて見なおすと、男の顔に日本人の輪郭が浮び出る。²¹

乗車中の久三の眼差しに入る「男」に対して、久三は「はじめどうしてもその男に気を許せないものを感じて厭だった」と思っている。しかし、この「男」が「眼鏡をかけて本を読みはじめ」と、久三の内面に変化が起こり、「男」に対して「中国人でこんなときにも本を読めるという人は、よほど偉い人にちがいあるまい。」と思い、最終的には「男の顔に日本人の輪郭が浮び出る」と思うように至る。久三にとって、「男」が「中国人」であるか、それとも「日本人」であるか、という判断の基準は極めて簡単で、「黒枠の眼鏡」や「本を読める」といった当時の植民者にしか持てない特権的な物や行為である。久三の内面では、「日本人＝植民者」と「中国人＝被植民者」からなる権力構造が構築されていると言えるだろう。久三の態度の変化は、「中国人＝被植民者」に対する自己

²⁰ 前掲書 11、pp.430-431

²¹ 前掲書 11、pp.329-330

の「日本人＝植民者」としての優位性を表象し、こうした変化は、久三が根源的に植民者＝抑圧者であることを意味すると言っても過言ではない。では、次に抑圧者の視線を持つ久三の「移動」、即ち「引揚げ」を改めて見てみたい。

やがてプラットフォームがよごれた一枚の紙片れのように遠ざかる。巴哈林の町がみるみる地面のうねりの中に沈んでゆく。[...] 久三は、まるでそうする義務があるかのように、逃げ去っていく風景をいつまでも眺めつづけた。たしかに半分は、過去に対する教えこまれた因習的情緒である。しかし残りの半分は、その情緒のもとになった二十年間をもぎとられる肉体的な痛みであった。²²

下線部に書かれているように、久三は巴哈林を離れる列車の中で、日本に背を向けて、視線を巴哈林に注いでいる。つまり、久三は、本土・日本を目的地として移動しながらも、植民地・巴哈林に未練を残している。久三がこのような複数の視線を持ったままでも移動しているのは、恐らく、安部の満洲と日本を同時に故郷と認識している曖昧な故郷意識が、分身としての久三に託されているからだと思われる。引用後半部の「肉体的な痛み」は注目に値する。未練の対象である巴哈林は、久三にとって眺め続ける義務のある故郷であると同時に、彼に「肉体的な痛み」を与える空間でもあるのだ。

つまり、久三の「移動」には、日本を目的地とする引揚げの他に、「痛み」の空間である植民地都市・巴哈林からの逃走、もしくは逃亡という意味合いも含まれるのである。久三が巴哈林から逃亡する際、テキストでは「久三は、やっと逃れてきた巴哈林の町のほうを、振向いてみた。かすかな白い雲の裂け目があった。遠く、風の中で、大気がはためく。急に恐ろしくなってきた。」²³と表現されている。久三の心情は、巴哈林を離れる際の心情とは明らかに異なっている。久三が巴哈林を離れる際、「逃げ去っていく風景をいつまでも眺めつづけた」が、現在となっては巴哈林に関して、「やっと逃れてきた」町と思うようになっている。とりわけ、未練の対象である巴哈林が、「かすかな白い雲の裂け目があった。遠く、風の中で、大気がはためく。」と恐怖感を覚えさせる空間と化している。ここでは、目的地の日本が全く語られないまま、「急に恐ろしくなってきた」巴哈林の町から逃走しようとする久三の内面のみが描かれている。久三の「移動」は、巴哈林に親近感を持ちながらも日本を目的地とする引揚げから、巴哈林に対して恐怖を実感することで、単なる植民地からの逃亡へと変容している。

従って、久三の「移動」には、日本への引揚げの他に、満洲から逃亡するという意味合いが含まれていると言えるだろう。久三の「移動」に引揚げのみでなく、満洲という恐怖の空間からの逃亡という側面が見られるのは偶然ではなかろう。筆者は、安部が満洲亡命文学、とりわけ満洲亡命文学の代表者・蕭軍の作品に影響されたことで、こうし

²² 前掲書 11、p.328

²³ 前掲書 11、p.343

た独特な「移動」を意図的に描いたと考える。次節では、その詳細を明らかにしたい。

三、満洲亡命文学と安部公房

1950年代後半、安部公房は「記憶」の再構築によって、リアリズム芸術作品の創作に新しい方法論を提供しようとしている。それは同時に、自らの引揚げ体験や植民地体験にある植民者の「記憶」を再構築してしまうことである。しかし、「記憶」とは実に曖昧なものであるため、安部自身の引揚げ体験や植民地体験が必ずしも正確に喚起されているとは言えない。『けものたちは故郷をめざす』では、久三はソ連軍の侵略、中国国内戦争などを経験している。こうした出来事は確かに多くの満洲からの引揚げ者が直面した事実である。例えば、引揚げ者の証言によれば、ソ連軍は「強姦」や「略奪」などのような暴行を加えている²⁴。しかし、安部は実際にこうした悲惨な体験をしなかったという点は注目に値する。彼は自身の引揚げについて次のように記している。

しかし、満洲は、意外に平穏だったし、いっこうに戦争が終わる気配もない。[...] 八月になって、急に戦争がおわった。ふいに、世界が光につつまれ、あらゆる可能性が一時にやって来たように思った。だが、つづいて、苛酷な無政府状態がやってきた。しかしその無政府状態は、不安と恐怖の反面、ある夢を私にうえつけたこともまた事実である。²⁵

安部の自筆年譜に書かれているように、終戦直前の満洲は「平穏」だった。満洲は終戦後、「苛酷」な「無政府状態」に陥ったが、それは「不安」や「恐怖」ではなく、「夢」を彼に与えている。従って、久三の経歴には、安部自身の実体験の他に、他人の経験も重なっていると言えるだろう。つまり、安部公房が再構築しようとしている過去の「記憶」は、すべて自身の実体験によるものではなく、共有されている他人の「記憶」が入り混じったものと思われる。『けものたちは故郷をめざす』における久三の「移動」に、安部自身の過去の实体験には見られない満洲からの逃亡が読み取れるのは、安部の「記憶」に満洲亡命作家の「記憶」が混同されているからではないかと思われる。

満洲亡命文学とは、故郷の満洲が日本の植民地になった故、満洲から亡命する作家が書いた文学作品のことである²⁶。満洲亡命作家の代表者、蕭軍（1907～1988）、蕭紅（1911～1942）などの作品は1930年代後半から、魯迅の推薦で左翼文学として日本に紹介され、それらの作品は、満洲から逃亡する作者自身の実体験を基にしているため、帰郷や避難な

²⁴ 坂岡庸子（語り：溝口節）「満洲からの引揚げ体験」『帝国崩壊とひとの再移動 引揚げ、送還、そして残留』勉強出版、2011年9月

²⁵ 前掲書 8、p.278

²⁶ 「満洲亡命文学」の諸概念について、本稿では、張泉の『殖民拓疆与文学离散——「満洲国」「満系」作家/文学的跨域流动』（北方文艺出版社、2017年1月）から有益な示唆を得た。

ど満洲での「移動」をモチーフにするものが多い²⁷。一般的に、亡命とは、政治的抑圧などの理由によって、本国を脱出して他国に逃げることである。しかし、満洲亡命作家の場合、そもそも日本の植民地であり、自分にとっての本国でもない満洲から逃亡して、本国に逃亡する事例が多い²⁸。従って、満洲亡命作家の「移動」は、正確な亡命と言うよりも、地理的故郷という居住地を離れ、祖国に逃亡する独特なものである²⁹。つまり、満洲亡命作家の「亡命」には、植民地を故郷とする引揚げ者の祖国日本への引揚げと共通性があると言えるのである。

ただし、満洲亡命作家の「亡命」が個人的行為であるのに対して、敗戦後における引揚げ者の引揚げは国家レベルの行為であるという相違点も予め指摘しておかなければならない。満洲亡命作家の作品は、概ね満洲から逃亡する作者自身の実体験が投影されている点において、引揚げ文学と通ずるものがある。このように考えれば、引揚げ作家である安部公房が、満洲亡命作家の作品から示唆を与えられた可能性は否定できない。筆者は、安部公房は満洲亡命文学の代表者・蕭軍の作品に影響されていると考えるものである。

蕭軍、本名劉鴻霖は、1907 年中国遼寧省錦州に生まれた。満洲事変後、軍隊に入り、ハルビンで抗日運動に参加すると同時に文学活動を始めた。34 年 6 月、ハルビンから青島へ脱出し、同年 10 月、上海に逃れた。日中戦争が全面的に開始されてからは、蕭軍は上海を離れ、中国共産党が支配する中国西北部に逃れた。50 年代から、中国共産党との確執が深まる中、蕭軍の作品は発禁処分を受けた。文化大革命時期において、蕭軍は典型的な批判対象となり長い間強い政治的抑圧を受けていた。1980 年に名誉回復されるが、活動することがないまま 8 年後の 1988 年に亡くなる。

上記の略歴を見ると、蕭軍と安部公房とには共通点が二つあることが分かる。一つ目は、二人とも、青少年期を満洲で過ごす、外部の政治的抑圧によって満洲を離れざるを得なかったことである。二つ目は、蕭軍が中国共産党の政策に反対したことにより、その存在が数十年間抹消されたのと同じように、安部も日本共産党との確執により入党 10 年後の 1960 年代に日本共産党から除名されたことである。こうした共通する経歴は、両者が接近できる知的基盤を作り上げたと言えるだろう。蕭軍を高く評価した日本人作家は中野重治である。蕭軍と中野は 30 年代から文通をして各自の文学に対する意見を交わしている。蕭軍が上海に滞在した際、中野宛の手紙の中で次のように書いている。

私は今後中国と日本とが新文学の創作と論評との方面で、いつそう多く相互にこれらを系統的に紹介し、かくて文学上に相互の研磨と両国の人民たちが共同に求め

²⁷ 満洲亡命作家の代表者である梁山丁（1914-1997）の『緑なす谷』（1942）、蕭軍の妻である蕭紅の代表作『生死の場』（1934）、『呼蘭河の物語』（1940）が例として挙げられる。

²⁸ 満洲亡命作家のうち、梅娘（1916-2013）のように日本に逃れる作家もいる。

²⁹ 張泉は『殖民拓疆と文学离散——「満洲国」「満系」作家/文学的跨域流动』の中で、満洲亡命作家の特殊な移動が「離散」（diaspora）であると指摘している。

ているものは何かをもつと了解する効果とを収めるべきだと思います。³⁰

中野重治は蕭軍の提案に賛成を示し、「それは日本のほとんどすべての作家、すべての読者の要求です。雑誌『文藝』も恐らくそれを取り上げることと思ひます。それは他の點でも私達に役立つでせう。」³¹と返信している。しかし残念なことに、1937年5月と6月の間に交わされた文通も、全面戦争が勃発したため、断たれてしまった。蕭軍を高く評価した中野は、安部の日本共産党時代における重要な人物でもある³²。従って、安部が中野を経由して蕭軍を知る可能性は高い。安部自身は、蕭軍の作品から影響を受けていることについて、明確に語ったことはないが、彼が亡命文学と亡命作家に対して興味を持っていることは記録に残っている³³。また、新潮社の安部公房全集には、『けものたちは故郷をめざす』について「竹内実によれば、安部公房は中国の作家・蕭軍の短編『三人行』に構想を得てこの作品をまとめた」³⁴とあって、安部が蕭軍の作品に触発されて書いた作品であると記されている点は注目に値する。しかし、筆者の調査によれば、『蕭軍全集』（中国華夏出版社、2008年1月）に収録されている作品の中には、『三人行』というタイトルの作品は含まれていない。ただし、安部公房と親交を持つ竹内実の蕭軍論は尊重すべきものである。竹内は蕭軍の作品について、「いまひとつには、創作方法上の前衛的な実験——アヴァンギャルドの欠如ということが原因になっていないであろうか。蕭軍が、非政治的であることによって批判をうけ、非違反をうけることで、その作品の生命をならえさせたとするなら、これこそむしろ文学の政治にたいする、皮肉なりアリズムといえるかもしれない。」³⁵と述べている。

引用に示されている通り、蕭軍はその作品が「創作方法上の前衛的な実験——アヴァンギャルド」であるために、政治性を重視する当時の中国文学から排除された。従って、竹内が、同じく前衛文学を通して政治と文学との関係を再認識しようとする安部に、蕭軍の存在を告げた可能性が考えられる。57年1月に刊行された『けものたちは故郷をめざす』が蕭軍の作品から示唆を受けている、という仮説が成立するならば、安部が参照した蕭軍の作品は、57年1月前に邦訳されたものに限る。具体的に、『水雲山島』、『同行者』（1937）、『第三代』、『未完成の構図』（1938）、『江上』『羊』『愛すればこそ』『妻なき男』（1940）がある。全集で取り上げられた作品名『三人行』とは、恐らく、『第三

³⁰ 蕭軍「中野重治に」、鹿地亘訳『中野重治研究』筑摩書房、1960年9月25日、p.402

³¹ 中野重治「蕭軍へ」『楽しき雑談・第2』筑摩書房、1948年2月25日、p.244

³² 1956年4月、チェコから作家大会（4月22日～29日）の招待状が「新日本文学会」に届き、当時まだ共産党員である安部公房を派遣することに決めた人が中野重治である。

³³ 1979年のインタビュー「内的亡命の文学」において、安部は「中南米はいわば亡命者だけでつくったような国だから、[...] そのことが逆に、文化的には、先進性を与えているような気がする。」（『安部公房全集 26』新潮社、1999年12月、p.381）と述べ、ガルシア＝マルケスを例に、亡命者によって書かれた中南米文学を高く評価している。

³⁴ 「作品ノート」『安部公房全集 6』新潮社、1998年1月、p.8

³⁵ 竹内実「政治的リアリズムと文学的リアリズム——蕭軍批判をめぐる——」『中国——同時代の知識人』合同出版、1967年5月、p.158

代』と『同行者』の記述間違いではないかと思われる。筆者の考察によれば、安部が参照した蕭軍の作品は、『同行者』と『羊』である可能性が最も高いということになる。

四、被抑圧者の物語——『同行者』と『羊』

『同行者』は1937年、小田嶽夫が邦訳して改造社から刊行された蕭軍の短編小説である。主人公の「僕」は、満洲の都市「舒蘭城」を目指して徒歩で旅をしているが、旅するうちに「僕」は目的地の「舒蘭城」を見失ってしまう。「僕」は旅の途中で、ある「男」と出会い、一人旅の寂しさを紛らわすために、この「男」と三日間、共に旅をすることになる。最終的に、「僕」は「男」の肉体と智慧に魅了される中、物語は終わる。

『同行者』について、浅見淵は「孤獨を棲家として、北支の曠野を目的もなく彷徨つてゐる放浪者の老人の姿が、読み終つてからも何時までもここに沁みて離れないのである。[...] 頼るべきは自己と自然だけで、興廢つねない不安な政治に生活の據りどころの無いところからも生まれて來てゐるのではないかしら。」³⁶と評価している。浅見の評価に見られように、『同行者』が読者の「ここに沁み」たのは、「放浪者」が「不安な政治に生活の據りどころ」を奪われた点に共感を抱くからである。つまり、『同行者』における登場人物の移動は、政治的抑圧によって強いられたものであり、また、その移動は次第に目的地を失う移動である。従って、『同行者』で展開されている移動は、目的地の日本が次第に曖昧になる引揚げから、ひたすら植民地からの逃亡へと変容した『けものたちは故郷をめざす』で描かれている移動と共通していると言えるだろう。テキストの細部においても、両者の相似性を指し示す箇所が見られる。

「いえ僕は行つて試して見ませう、僕は護照を持つてゐます。[...] 行きませう、僕は護照を持つてゐますから・・・」

「ここらでは護照もあまり訳に立ちません。彼等が門をあけてくれなければどうにもなりませんわい。[...]」³⁷（『同行者』）

「敵か味方かも分からんやつを、歓迎するはずがないじゃないか。」

「証明書はもっています。」

「証明書？..... [...] どちらの味方にするかもまだ決めておらんような連中に、証明書がなんの役にたつ。」³⁸（『けものたちは故郷をめざす』）

『同行者』に描かれている「護照」とは、満洲の土地で自由に行き来するための通行書である。『けものたちは故郷をめざす』の中で、久三がロシア軍から発行された「証明書」も満洲で自由に行動できる通行書である。動乱の最中の満洲では、『同行者』にお

³⁶ 浅見淵「蕭軍」『市井集：浅見淵随筆集』砂子屋書房、1938年12月10日、pp.170-172

³⁷ 蕭軍「同行者」、小田嶽夫訳『文藝』第5巻第12号、改造社、1937年12月、p.58

³⁸ 前掲書11、p.343

る「護照」や、『けものたちは故郷をめざす』の「証明書」は役に立たないという点で同じである。既に述べたが、安部自身の引揚げは久三ほど困難なものではなかったために、テキストで提示されている久三の「証明書」のエピソードは、恐らく、蕭軍の『同行者』に描かれている「護照」のエピソードといった第三者の「記憶」に由来していると言えるだろう。ただし、二つの作品における「同行」の意味合いが異なることも看過できない。『同行者』において、旅を共にする人間関係について、以下のように描かれている。

始め僕はいたく彼を嫌ひ、彼と離れて獨りで行かうとしたが、舒蘭城へ行く山路はただこの一と筋だけで、今までに通つたことも無く、且つ泥濘で、踏み深い朝霧を衝いて、烏拉街を出た時はたしかに孤獨の旅行者につきものの茫然とした、何か人戀しい哀感を感じたのを憶えてゐたのであつた。³⁹

旅の始まりでは、「僕」は「獨りで行かう」としたが、旅があまりにも「孤獨」であるため、「人戀しい哀感を感じた」ことによって、内面が変化し、同行する「彼」に能動的に接近するようになったのである。しかし、こうした同行する人間への自発的、もしくは能動的接近は『けものたちは故郷をめざす』では見られない。共に旅する久三と高との関係について、テキストでは「なぜ久三を同行者にえらんだりしたのか？ [...] 一人よりは二人のほうが心強いというわけだ——そんな理由はばかばかしいと思っていても、それ以上考えないためには、そう信じこむよりほかなかった。」⁴⁰と記されている。

同行する理由について、久三は「一人よりは二人のほうが心強い」と語っている。この理由に関して、久三自身も「ばかばかしい」と思っているが、「そう信じこむよりほかなかった」のである。久三の内面は高との旅を能動的に望んでいるのではなく、むしろ高と同行することを拒んでいるように見える。外部の危険な環境によって、受動的に高と同行することを強いられた久三は、『同行者』で能動的に旅人と同行する「僕」とは異なっている。『同行者』では旅の寂しさを紛らわすために、旅人が自然に誰かと同行するのに対して、『けものたちは故郷をめざす』では、旅人は旅の恐怖から身を守るために、誰かと同行することを強いられている。換言すれば、『同行者』では、満洲での旅に危険性が見られないのに対して、『けものたちは故郷をめざす』では、満洲での旅は危険を伴うものなのである。満洲での旅における危険性は、その景色についての異なる描写からも伺える。『同行者』では、旅人の視線に入る満洲の風景は次のようなものである。

河の向ふ岸の高梁の林はひつそりとしてゐ、こちら岸の樹林、岸邊に近い蓬、それから遠い山の上に重なつてゐる雲もまったくひつそりとしてゐた。すべてが洗ひ清められたやうであつた。今し方過ぎた河流さへ忘れてしまひさうになり、ふと見

³⁹ 前掲書 37、p.49

⁴⁰ 前掲書 11、p.352

ると、それは實に平凡な流れに見えた。⁴¹

ここで描かれている川と森の景色は癒しの空間というイメージを作り出している。同じ川と森の景色だが、『けものたちは故郷をめざす』では、「川岸に柳の灌木が密生しており、中で大きな動物の骨につまずく。[...] 川をわたるとこちら側には樹が一本もなく、ただゆるやかな地面のうねりが限りなくつづき、まるで鉛で固めた動かない海のようにある。」⁴²と記されている。久三が目の当たりにしている川と森は、「大きな動物の骨につまずく」や、「鉛で固めた動かない海」といった「死」のイメージを示唆するものであり、『けものたちは故郷をめざす』における満洲は、明らかに「死」を連想させる恐怖の空間として描かれている。『同行者』に触発されて書かれた『けものたちは故郷をめざす』には、『同行者』と共通するプロットが描かれ、テキストの細部まで『同行者』の影響を受けた痕跡を残している。しかし、同行する人間への態度、景色の描写の異なりによって、同じ満洲の風景が、『同行者』では癒しの空間として描かれているのに対して、『けものたちは故郷をめざす』では、「死」のイメージを持つ恐怖の空間として描かれている。

テキストにおけるこうした差異は、恐らく安部公房と蕭軍のアイデンティティの差異に由来する。『けものたちは故郷をめざす』において、巴哈林から日本へ逃れる際、久三は故郷である巴哈林について、未練に思う気持ちから次第に「急に恐ろしくなってきた」と思うように変化している。更に、久三の満洲での移動と共に明らかになったものは、高石塔と大兼が象徴する被植民者と植民者から構築される抑圧関係である。久三はその移動過程において、高石塔に代表される被抑圧者集団からの離脱欲求と、大兼が代表する抑圧者集団への加入欲求を通して、日本人という植民者＝抑圧者としてのアイデンティティに目覚めたのである。例えば、久三の次の行為は注目に値する。

久三は思わず腰をあげ、吸いよせられるように塀に近づいた。でっばりに足をかけ、両手で支えてのぞきこむ。[...] 久造はすすりあげながらも、いつまでも見飽きなかった。[...] 久三も叫び返した。「日本人だぞ、ばか、日本人だぞ！.....」⁴³

引用部に示されるように、日本人と被植民者の世界は「塀」によって分割されている。久三が「日本人」という言葉を叫ぶことは、日本人である植民者共同体への加入欲望を示唆する同時に、日本人である自己が被植民者の世界にいることへの嫌悪を表象している。長年住み着いていた土地であるにもかかわらず、満洲という恐怖の空間からの逃走を何よりも重視する久三は、その移動過程において、他者との抑圧関係を通して、自らの抑圧者である位相を再確認したのだと言えるだろう。久三の身に起こる一連の出来事は、登場人物に自身の経験を投影した、引揚げ者である安部公房の植民者＝抑圧者とい

⁴¹ 前掲書 37、p.48

⁴² 前掲書 11、p.350

⁴³ 前掲書 11、p.428

う属性を指し示していると言えるだろう。

『同行者』において、「僕」の移動は同じく動乱の満洲で展開されるが、そこに満洲の土地から離れようとしない「僕」の内面が描かれている点が着目される。

泥地の上の足跡を探つて見ると、あの大きく、長い僕の連れの足跡が識別けられた。小路の上にまだ何と鮮かに残つてゐることよ！ [...] 坂を上がったところで、あの小さい家とその左側の一带の涯ない白樺の林を眺めて見たが、僕等の昨夜歩いた道は判らなかつた。——そしてあの大きな足跡も識別けられなかつた。⁴⁴

引用に描かれているように、「連れの足跡」が「鮮かに残つてゐる」から「識別けられなかつた」と変わり、「僕」は「足跡」という比喻を通して、過ぎ去った空間を常に恋しく感じていることが読み取られる。久三の「巴哈林の町のほうを急に恐ろしくなってきた」と比較すれば、明らかに異なっていることが分かる。『同行者』には、動乱で且つ生命の保証ができない満洲での移動が描かれているが、その舞台となっている満洲は、全く恐怖を感じとることのない癒しの空間である。『同行者』の訳者である小田嶽夫は蕭軍について、「彼は好んでその出身地満洲地方に材を取る。[...] 素材的に言つたなら暗い作風に属することになるが、作中にしみわたる作者のあたたかい愛の心と、人物を包む自然へ寄する一種牧歌的心情とが作品を單なる暗さに終らせてゐない。」⁴⁵と述べている。

小田が評している通り、「素材的に言つたなら暗い作風に属することになる」というのは、『けものたちは故郷をめざす』にも当てはまる。しかし、亡命作家・蕭軍はその「あたたかい愛の心」と「人物を包む自然へ寄する一種牧歌的心情」で、「作品を單なる暗さに終らせてゐない」のである。『同行者』では、同行する登場人物の間に抑圧関係が見られないのも、亡命者である蕭軍に被抑圧者としてのアイデンティティが内在しているからだと言えるだろう。亡命者＝被抑圧者の蕭軍の「あたたかい愛の心」は、引揚げ者＝抑圧者としての安部公房には見られない。こうした引揚げ者と亡命者との相違は、二つの小説に共通する部分を与えながらも、根本的差異をもたらしているのである。

最後に、『けものたちは故郷をめざす』と蕭軍の短編小説『羊』とを比較してみたい。『羊』は、『同行者』と同じ時期に発表された作品である。1940年、小田嶽夫が翻訳して、東成社から出版された。まず、『羊』の梗概を紹介する。語り手の「私」は、理由のわからないまま牢獄に閉じ込められ、その牢獄の窓からは、羊が見える。「私」はロシア人の子供に学問を教えているうちに、彼らが故郷を思う気持ちの強さに驚く。「私」は牢獄の中で羊泥棒とも知り合いになるが、彼は脱獄を図り、失敗して処刑され、「私」が死んだ羊泥棒の死体を見るところで物語の幕が閉じる。

⁴⁴ 前掲書 37、p.72

⁴⁵ 小田嶽夫「解題」『愛すればこそ』東成社、1940年3月、pp.1-2

小田が「一人稱の記録風な小説」⁴⁶と評しているように、本作は、蕭軍が満洲から亡命する前に、投獄された実体験を基にしている。記録文学に関心を寄せている安部公房が『羊』を気に入っていた可能性はある。更に、『羊』の登場人物が故郷のイメージを喚起する仕方が、『けものたちは故郷をめざす』と似ている点は注目に値する。

ごらん！これがモスクワだよ！僕はモスクワが見られるんだ！ごらん！これはみんな僕等の國なんだ……[...] 彼等は頭をふるはせながらあげ、擴大された寫眞を私に指さして見せた。[...] 僕等あ國に歸るんだ、國に歸るんだ、キネマで僕等あ見たよ、雑誌でも見たよ……冬は白い銀のやうな雪がふるんだ……⁴⁷

投獄されたロシア人の子供達は、「雑誌」に掲載されている「モスクワ」の「寫眞」を見て、自分達が今まで一度も行ったことのない故郷「モスクワ」の風景を想像し始める。彼らの祖国＝「故郷」のイメージは、自らの実体験によって喚起されているのではなく、雑誌によって間接的に喚起されている。そして、久三の日本に対するイメージの喚起の仕方についても、「日本について、知っていることといえば、学校の教科書から想像しているだけのことである——（富士山、日本三景、海にかこまれた、緑色の微笑の島 [...]）」⁴⁸と記されている。植民地で生まれた久三にとって、内地の日本は具体的なイメージを持たない「想像」したものにしかならないのである。教科書によって美化された日本のイメージは、久三の内面で加工され、日本がそのまま「美」の象徴となって、植民地・巴哈林における「死」のイメージと対照的に描かれている。教科書などを通して美化された形で内地の日本を知ることは、青少年期を植民地で過ごした引揚げ作家に共通することであるから、安部が『けものたちは故郷をめざす』を創作する際、『羊』の構想を参考にしたと必ずしも断言はできないが、『羊』によって自らの植民地での実体験を喚起した可能性も否定できない。その具体的根拠をあげるとするなら、例えば、次に示す二つの作品の最終場面が似通っている点が、両者の関連性を示唆していると思われる。

羊盗人は死んだ。「太平室」の窓からのぞくとはつきり見える、彼の身體は長々と地上に睡り、傍らにあの身體に合はない綿入れが落ちてゐた。その灰色の綿がもう臓腑のやうに外に食み出してゐた。⁴⁹（『羊』）

前を船艙の壁に、後ろを機関室の壁に、そして右を水槽に、左を舷側でかこまれた長方形の狭い間隙だった。[...] 高は壁の継ぎ目の鉄板の穴と、足首とを手錠でつながれ、全身かぎ裂きだらけになり、垂直の壁に足を支え、まがった壁を背をもた

⁴⁶ 小田嶽夫「蕭軍」『支那人・文化・風景』竹村書房、1937年11月20日、p.178

⁴⁷ 蕭軍「羊」、小田嶽夫訳『愛すればこそ』東成社、1940年3月、pp.92-97

⁴⁸ 前掲書 11、p.316

⁴⁹ 前掲書 47、pp.138-139

せかけて、デッキまでつきぬけている天井をじっと見上げていた。⁵⁰（『けものたちは故郷をめざす』）

二つのテキストの最終部分を比較すれば、『羊』における「太平室」と、『けものたちは故郷をめざす』の機関室の「狭い間隙」は、共に人間を幽閉する空間として描かれ、共に「死」のイメージを連想させる。更に、「羊盗人」の「綿がもう臓腑のやうに外に食い出してゐた」という死体の様子は、「高石塔」の「全身かぎ裂きだらけ」な姿と非常に似ている。こうした空間と人物の設定がこれ程までに似ているということは、『けものたちは故郷をめざす』の構想が、『羊』から示唆を得ていることの傍証だと言えるだろう。ただし、両者の根本的な違いにも言及しておかなければならない。蕭軍の『羊』についての川俣優の論考には注意すべきものがある。

蕭軍はこうした“羊”のイメージを強調して犠牲者の運命を表現しようとしていたと思われる。[...] 蕭軍は満洲国からの亡命者としてこうした無情な扱いを受け、追いつめられた気持を抱いた。自分たちは満洲国にも上海にも、身のおきどころがない犠牲者だという蕭軍の思想が、この時期の作品に現れる“羊”たちの姿によって表現されているとみなせよう。⁵¹

下線部に示されているように、蕭軍は満洲と上海において政治的・社会的抑圧を受けたために、抑圧される存在を象徴する「羊」を比喩的に語ることによって、「亡命者」＝「犠牲者」の運命を表現しようとしている。羊盗人の死体に関する語りを改めて読むと、語り手の「僕」は自由を与えられた知識人であるものの、羊盗人の死体に対して十分な敬意を払いながら語っていることがわかる。つまり、語る側は語られる側を差別せずに語り、テキストは同一水準の権力構造の上で進行していると言えるだろう。『羊』の語り手が差別的な視線を持たずに語るとは、川俣の文章に指摘されているように、まさに作者の蕭軍が「満洲国の亡命者」という抑圧される者だからこそ可能となったのである。

しかし、『けものたちは故郷をめざす』における久三の語りには、明らかに語られる者に対する差別的視線が隠されている。読者は、高石塔の最期を冷静に観察している久三の語りから、彼の同情心を全く感じることはできない。久三のこうした語りは、高石塔を最後まで日本人である自分と同じ位置に置くことができなかつた証拠であり、引揚げ者である久三の抑圧者としての属性を同時に裏付けていると言えるだろう。従って、自身の実体験を登場人物に投影している安部公房は、引揚げ者である以上、その植民者＝抑圧者としてのアイデンティティを意識的に抑制しようとしていても、テキストによって、その抑圧者としての側面が無意識に露呈していると言えるだろう。

⁵⁰ 前掲書 11、p.446

⁵¹ 川俣優「亡命者の文学——青島と上海における蕭軍の作品をめぐる——」『明治学院論叢』第 528 号、1993 年 10 月、p.12

おわりに

本稿では、『けものたちは故郷をめざす』の主人公・久木久三の植民者＝抑圧者の視線を分析することによって、引揚げ者とは根本的には植民者であるために、抑圧者としての側面を持っていることを実証し、引揚げ作家の安部公房の植民者＝抑圧者としての側面を明らかにした。小説の中で、安部は自らの引揚げ体験や植民地体験が象徴する植民者の「記憶」を再構築したが、その「記憶」の中には、満洲亡命作家の「記憶」も混同されている。満洲亡命作家に、地理的故郷を離れて祖国に逃亡する者が多いという点は、植民地を故郷とする引揚げ者が祖国へ引揚げるという行為との共通点を見出すことができる。本稿では、安部公房の『けものたちは故郷をめざす』と、満洲亡命作家・蕭軍の作品『同行者』、『羊』とを比較することで、両作品の関連性を明らかにした。

『同行者』で描かれている登場人物の移動には、無意識のうちに目的を見失ってしまう点で、『けものたちは故郷をめざす』で描かれている目的地の日本が次第に曖昧化していく移動との共通点が指摘できる。しかし、同じ満洲を舞台にしているものの、『同行者』では、満洲は癒しの空間として描かれているのに対して、『けものたちは故郷をめざす』では、満洲は「死」のイメージを持つ恐怖の空間として描かれている。こうした異なる描写は、引揚げ者である安部公房の抑圧者としての属性と、亡命者である蕭軍の被抑圧者としての属性との差異に由来すると考えられる。『羊』と『けものたちは故郷をめざす』は、その故郷意識の喚起の仕方と、作品の最終場面の描写が類似している。ただし、『羊』の語り手が被抑圧者の立場から語っていることが、蕭軍の亡命者という抑圧される存在を意味している一方で、『けものたちは故郷をめざす』における久三の語りは、久三の抑圧者としての属性を裏付け、引揚げ者である安部の抑圧者としてのアイデンティティを表象しているとの結論に至った。本稿では、『けものたちは故郷をめざす』と、『同行者』と『羊』との関連性を比較検討することによって、引揚げ文学は引揚げ作家の実体験のみが投影されているのではなく、満洲亡命作家の経歴を含む多層的な実体験が、それぞれの作品に投影されているということを明らかにした。

【付記】 本稿は 2018 年 6 月 9 日に日本大学で行われた「日本比較文学会第 80 回全国大会」で発表した報告「安部公房と満洲国の亡命作家の「移動」——他者を語る文学テクスト」を加筆修正したものである。本論文は、2018 年度松下幸之助記念財団の研究助成（18-G11）による研究成果である。